

大学院生によるアメリカの小中学校での 体験型海外教育実地研究報告Ⅲ

小原友行・深澤清治・朝倉 淳・松浦武人・神山貴弥*・高谷直樹**
竹内俊介***・小笹由花***・日高悠子***・古市果菜絵***・安田知佐子***
(2009年11月30日受理)

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students in Elementary / Secondary Schools in the United States (Ⅲ)

Tomoyuki KOBARA, Seiji FUKAZAWA, Atsushi ASAKURA, Taketo MATSUURA
Takaya KOHYAMA, Naoki TAKAYA, Shunsuke TAKEUCHI, Yuka KOZASA
Yuko HIDAKA, Kanae FURUICHI and Chisako YASUDA

Abstract. The purpose of this report is to examine the significance of the teaching practice in elementary / middle schools in the United States by a group of Japanese graduate students. In Overseas Teaching Practicum held in schools in the State of North Carolina, the United States of America, for a week in September, 2009, the six Japanese graduate students majoring in education planned and gave lessons in some schools in America on Japanese society and culture in English. As a result, it was recognized that the teaching experiences in the international setting could contribute to the enhancement of the teaching skills, international understanding, understanding of home culture, and self-transformation of the participant students. Furthermore, considering the overall achievements of the projects during the past years, some commonalities were identified in the processes and focuses of their lesson planning/implementation, and the changes which took place during the project.

1. はじめに

2009(平成21)年度から開始された広島大学大学院教育学研究科における教職高度化プログラムの選択科目として開講されている「体験型海外教育実地研究」は、広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター(略称はGPSC)が企画・実施しているものである。本年度は第3回目の実施であるが、博士課程前期1年の大学院生5名(小学校中心3名,中学校中心2名)と東広島市内の現職小学校教員1名が参加して行われた。

授業は前期の集中科目という位置づけではあるが、内容的には、4月～8月の事前研究,9月12日～21日の米国ノースカロライナ州グリーンビル市内の公立小・中学校(ウォールコート小学校,エルムハースト小学校,C.M.エッペス中学校)での教育実習と私立の幼小中高一貫校の見学,州

都ローリーおよび首都ワシントンDCでの多文化理解学習のための教材調査,そして10～11月の事後研究による教材の完成とレポート作成,研究成果報告会となっている。

この授業科目の大きなねらいは、次の3点である。第1は、参加者が既に教員免許を持ち、これから優れた教員を目指している大学院生および現職教員であるため、教員としての実践的指導力の向上を図ることである。第2は、日本文化に関する教材を開発し、それをアメリカ合衆国ノースカロライナ州の公立小・中学校において英語で授業を行うという体験や、現地での経験豊富な教師の授業を直接見学するという経験を通して、日米文化の相互理解を図るための教材開発の力量を育成することである。そして第3は、体験型海外教育実地研究の企画・実施・評価の過程を通して、グローバル・パートナーシップを推進するリーダー

*同志社大学, **東広島市立三ツ城小学校, ***広島大学大学院教育学研究科博士課程前期大学院生

となる資質を育成することである。

本年度の実施においても、イーストカロライナ大学教育学部、実習校であったエルムハースト小学校、ウォールコート小学校、エッペス中学校の関係者には大変お世話になった。

以下では、本年度の参加者それぞれの学習成果と自己変容、そしてプログラム全体の評価について紹介していきたい。

2. 2009年度「体験型海外教育実地研究」の概要

2009年度、本授業科目の実施状況は以下のとおりであった。

(1) 全体日程

- 4/8 (水) 2009年度「体験型海外教育実地研究」実施説明会
- 5/7 (木) 事前学習会：本授業科目の概要と計画
- 6/4 (木) 事前学習会：米国での実施授業案の検討
- 7/1 (水) GPSC 行事：米国ノースカロライナ州学校関係者（15名）との懇談
- 7/9 (木) 事前学習会：学習指導案の検討
- 7/18 (土) GPSC フォーラム：フォーラムおよび懇親会参加
- 7/19 (日) ワークショップ：米国での実施予定授業について米国側と協議
- 7/30 (木) 事前学習会：学習指導案および教材の検討
- 8/27 (木) 事前学習会：旅程の確認と諸手続
- 9/3 (木) 事前学習会：旅程の確認と諸手続
- 9/9 (水) 事前学習会：渡航前最終打合せ
- 9/12 (土) - 9/21 (月) 米国における体験型海外教育実地研究
- 10/1 (木) 事後学習会：振り返りおよび報告書の作成打合せ
- 11/12 (木) 「体験型海外教育実地研究」発表会

(2) 現地での日程

- 9/12 (土) 広島出発 米国ノースカロライナ州グリーンビル到着
- 9/13 (日) イーストカロライナ大学訪問
- 9/14 (月) グリーンビル現地学校訪問
- 9/15 (火) グリーンビル現地学校訪問
- 9/16 (水) The Oakwood School および Aredell-Parrott Academy 訪問

9/17 (木) グリーンビルからローリーへ移動
Exploris Middle School 訪問

9/18 (金) ローリー出発 ワシントン到着
ワシントン研修

9/19 (土) ワシントン研修

9/20 (日) 米国ワシントン出発 機内泊

9/21 (月) 広島到着

(3) 参加者およびグリーンビルにおける配置

本年度の「体験型海外教育実地研究」には、教育学研究科博士課程前期大学院生5名（内3名高度化プログラム生）、現職小学校教員（東広島市立三ツ城小学校）1名が参加し、広島大学教員4名が引率にあたった。また、同志社大学大学院生3名、同引率教員1名が同日程で渡航し、双方の研究について交流した。現地での学校配置、担当者、参加者、引率教員は以下のとおりである。参加者は各校において準備した授業を実施した。

【Elmhurst Elementary School (K-5)】

実施校担当者：Ms. Suzanne Hachmeister

参加者：古市果菜絵 安田知佐子

引率者：深澤清治 松浦武人

【Wahl-Coates Elementary School (K-5)】

実施校担当者：Ms. Cynthia Watson

参加者：日高悠子 高谷直樹

引率者：朝倉淳

【C. M. Eppes Junior High School (6-8)】

実施校担当者：Mr. Thomas Cooper

参加者：竹内俊介 小笹由花

引率者：小原友行

3. 参加者の報告

各参加者は、各校において実践した授業に関する「ねらい」「概要」「成果と課題」および授業の準備から実践を通じた「自己変容」について報告を作成した。次頁以降にこの報告を掲載する。

4. 本年度の授業の評価

(1) 本年度の授業と事前の取り組み

2009年度体験型海外教育実地研究（米国ノースカロライナ州）において実施された授業は、参加者の報告に続く表1のとおりである。

第3学年 総合「Let's enjoy Hina-Matsuri！」

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 日 高 悠 子

1. ねらい

本授業のねらいは、日本の伝統行事である雛祭りを知り、雛祭りを体験することによって日本文化に興味を持つとともに、伝統行事には人々の思いや願いが込められていることに気づかせることである。雛祭りは日本の伝統的行事であり、その裏には子どもの健康で幸福な成長を願う親の思いが込められている。雛祭りに込められた人々の思いを子どもたちに伝えることで、伝統行事には人々の思いや願いが込められていることに気付かせ、そして自分達の文化の伝統行事を見直す機会となるのではないかと考えた。



2. 概要

授業の導入では、まず本時のテーマを示し授業内容を説明した。展開の前半部では、「Hina-Matsuri」の紹介をした。雛祭りについてまとめたプリントを配布し、雛人形やひな壇、ちらし寿司などの写真をみせながら、「Hina-Matsuri」は2月に子ども達の健康で幸福な成長を願って行われる日本の伝統行事であり、ひな壇に雛人形を飾って祝うことを伝えた。その後雛人形の作り方を説明し、雛人形を作成した。児童達は思い思いの雛人形を楽しんで作っていた。

雛人形完成後、児童達に自分の作った雛人形と、その横に自分の名前を書いたネームプレートをはな壇に並べさせて写真撮影を行った。その後、日本には雛人形のような様々な伝統行事があること。その裏には様々な人々の思いや願いが込められていること、そして外国の文化にも興味を持って欲しいということを伝え、記念に金平糖をプレゼントして授業を終えた。なお、雛人形を作った際、先生方や他のメンバーにサポートに入ってもらいながら授業を行った。

3. 成果と課題

日本の雛祭りについて説明するところでは、雛人形の写真を見せると「beautiful」という言葉が聞かれ、児童達は普段触れることのない日本の文化に、興味を持っている様子だった。私の拙い英語で児童たちがどの程度まで雛祭りについて知ることができたのかは確認できなかったが、写真を用意したことで説明の拙さをカバーし、児童たちに雛祭りへの興味を持たせることができた。雛人形づくりも、工作が苦手な児童は嫌がるかと思ったが、それぞれ一生懸命に取り組んでいる様子がみられた。全員自分の雛人形を作ることができ、最後に自分の雛人形と写真撮影をすることができた。また、最後にみんなの雛人形をはな壇に飾って写真撮影を行うことによって、児童たちにもいい記念になったと思われる。余りの材料をすべて残してきたので、それを使って雛人形を授業後も作ることができると考えられる。授業を通して、児童は「Hina-Matsuri」を楽しんでいる様子だった。雛人形を作るときには、「もうひとつ作りたい。」と言ってくる児童や、自分の作った雛人形を他の児童と見せ合って笑っている児童もいた。最後に「Did you enjoy Hina-Matsuri?」と聞くと、児童は元気に「Yes!」と答えていたため、日本の文化に興味を持ち、楽しんで活動に取り組めたと考えられる。児童にとってよい異文化体験になったのではないだろうか。課題としては、まず授業の目的を児童に伝え切れなかった点が挙げられる。授業者の英語での雛祭りの説明が不十分だったため、何のために日本人が雛祭りを行うのか児童におさえさせることができなかった。また、雛人形の作り方の説明が不十分で、児童が混乱している様子が見られた。作る活動のときは、どのように手順を説明したら分かりやすいのかももっと考えていく必要があったと思われる。

【自己の変容】

英語で授業をするというプレッシャーがあり、授業の準備も大変で何度も挫けそうになったが、無事やり遂げたことで自分にとって大きな自信になった。アメリカと日本の教育には相違点もあったが、やはり子どもを大事に思う心は変わらないということが分かった。また、言葉が不自由でも、伝えたいという気持ちが大事だと学んだ。

第3学年 異文化理解「三文字熟語で表現しよう」

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 古市 果菜絵

1. ねらい

本授業のねらいは、子どもたちが漢字を用いてオリジナルの三文字熟語を作ることを通して、漢字を知り日本の文化に興味をもつことである。

また、たった三つの単語で相手に伝わるようになにかを表現する活動を通して、身近なものを改めて見つめなおし、表現するための想像力を活発にすることも目指している。クラスメイトが作った三文字熟語を交流することにより、物事を多角的に見たり、想像力を膨らませたりする楽しさを感じるきっかけになればと考えた。

2. 概要

はじめに、「雪月花」という言葉を提示しその意味を想像させると「自然」、「美しい」という答えが返ってきた。そこで、雪月花は四季の美しさを意味していることを伝えた。

次に筆者が考えたオリジナルの三文字熟語を紹介し、その意味を想像させた。それぞれの熟語の意味について児童からさまざまな考えが出た。

その後、いくつかの漢字とその漢字の発音や意味を英語で書いたワークシートを配布し、その中から漢字を三つ選んで三文字熟語を作った。児童は漢字を正確に書くことはできていなかったが、選んだ漢字を一生懸命書き写していた。色鉛筆などを用いてカラフルな作品に仕上げている児童が多くおり、早く作り上げた子はほかにも三文字熟語をいくつか考えていた。

出来上がった作品はどれもすてきなアイデアにあふれたものになっていた。作品を発表し、交流するときには担任の先生の促しもありほとんどの児童が作品を発表し、盛り上がった。

3. 成果と課題

担任の先生が筆者の授業の前にReadingの授業で日本のお米に関する教材を取り上げてくださり、児童の日本への興味が高まっていた。さらに、漢字に興味をもっている児童もおり、「一度漢字を書きたかった」と話していた。

漢字を書くことは児童にとって初めての体験であり、難しいかと懸念したがとても楽しそうに書いていた。また、日本の四季の風景写真を見せると児童から「good」とよい反応があり、季節の風景を見て美しいと感じるのは日本もアメリカも同じであることを実感した。

日本の文化や日本のよさを十分伝えることができたとは言えないが、児童も積極的に授業に取り組み、想像力豊かなおもしろい作品を作ることができていたと思う。課題としては、用意していた教材に頼った授業をしてしまい説明や発言が曖昧でうまく伝わらなかったことがあげられる。また、児童から出た意見を十分に理解し、授業に活かしていくこともできなかったこともとても残念である。

【自己の変容】

筆者は英語が不得意であるため、はじめは話が伝わらないのではないかとおそれコミュニケーションをとることを避けていた。しかし、話してみると筆者の話が皆さんが一生懸命理解しようとしてくれた。うまく英語を話すことができなくても、お互いに話そう、理解しようと思えば思いは伝わることを体験してとてもうれしく思い、筆者の自信となった。

Elmhurst Elementary Schoolを訪問したとき、多くの時間で教師が児童に対してプラスの言葉かけをしている様子を見せていただいた。児童をよくほめることで学級の雰囲気が高まり、児童の意欲を喚起していた。そのような教師の児童に対する積極的な働きかけを筆者もみならいたいと思った。



第4学年 学級活動「What is your treasure?」

東広島市立三ツ城小学校 教諭 高谷直樹

1. ねらい

本授業のねらいは、同年代の子が思う宝物について交流させることを通して、日本とアメリカの考え方や思いの同じところや違うところを、アメリカの子どもたちが知ることである。

また、日本の子どもたちが日本とアメリカに対する考え方や思いの同じところや違うところを知ることを通して、自分とは異なる国の文化や考え方について、国際理解の第一歩の「知りたい」という思いをもたせるために本単元を設定した。

2. 概要

- (1) 自己紹介と日本の子どもたちのクラス写真を紹介した。
- (2) 日本とアメリカでは、同じところもあれば違うところもあることに興味をもたせるため、日本のアニメをランキング形式で紹介した。さらに、そのアニメを知っているかどうかも尋ねた。
- (3) 本授業での目標を設定し、板書した。
- (4) 子どもたち一人ひとりにB6版の画用紙を渡し、宝物の絵を描かせ、またなぜそれが宝物なのかの理由も書かせた。子どもたちに紹介させる前に、日本の子どもたちがどんな予想を立てていたかを紹介した。



- (5) 日本の子どもたちが書いてきた宝物を紹介した。その際に、自分の宝物と同じものと同じ理由、違う宝物違う理由があるかについて興味をもたせるために、アメリカの子どもたちに日本の子どもたちが考える宝物について予想させた。その後、模造紙に貼った宝物の絵を掲示した。
- (6) 前に出て、全員分が見られるようにした（※写真）。そして、感想を発表させた。
- (7) 今日の授業の感想を話し、日本の子どもたちが作った『友だち』と筆で書かれたしおりをプレゼントした。

3. 成果と課題

- 宝物を紹介する前に、どんなものが多いか考えさせることで、子どもたちは自分の宝物と比べながら、作品を見ることができた。
- 導入部分で日本のアニメを紹介することで、日本とアメリカでは、同じところもあれば違うところもあることに興味をもちやすかったのではないかと考えている。
- 私自身のコミュニケーション能力が足りないということを強く感じた。英語で行うことに対する不安があり、的確な指示やアドバイスをすることができなかった。担任の先生に助けてもらう部分も多々あった。指示する内容について、もっと吟味する必要があった。

【自己の変容】

アメリカの学校を訪れることはもちろんのこと、アメリカの子どもたちに授業をするというのは、初めての経験であった。今回の実地研究で大きく影響を受けたことは、アメリカの子どもたち・先生たちのノンバーバルコミュニケーションの豊かさである。これは大いに学ぶべきところがあると感じた。表情や仕草を加えて相手に伝えることで、より豊かなコミュニケーションを図ることができるということを、日本の子どもたちに伝えていきたいと強く思った。

また、あまり英語で話すことが得意でない私をアメリカの子どもたち・先生方は温かく受け入れてくれた。知ろうとしてくれた。お互いの国の文化や考えには違いがあり、理解をするということは簡単なことではないと思う。しかし、発信するだけでなく、まずは受け入れ、そして知るということが、コミュニケーションの第一歩であると感じ強く感じるようになった。

第5学年 異文化理解「What are there events？」

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 安田 知佐子

1. ねらい

本授業のねらいは、日本とアメリカの年中行事を用いたスゴクゲームをすることによって、日本の文化に興味をもってもらうとともに、両国を比較することによって、文化の違いや伝統の違いやおもしろさを考えることにある。

2. 概要

本授業の流れは、まず、導入にあたる部分で日本の行事で有名なものを3つ写真と解説を入れながら紹介する。ここでは、正月、ひな祭り、七夕を取り上げた。次に、展開の部分では、日本とアメリカの年中行事が混合されたスゴクゲームを用い、少人数のグループでゲームをしながら一年の行事を学べるようにした。マスは18マスあり、スタートを正月、ゴールを大晦日に設定し、なるべく日本の行事が多くなるように作っている。マスごとに写真やイベントカードを作っており、イベントカードが置かれているマスに止まった場合、説明を読み、ミッションをこなすようにしている。ただし、説明は日本の行事しか用意せず、アメリカの行事については、自分たちで説明するように設定した。自分たちの国の行事を自分たちの言葉で説明することで、自国の文化・伝統の再認識と言葉で相手に伝える、説明する力を期待している。授業のまとめの部分では、本授業を通して、世界には様々な国があり、様々な文化・伝統があり、その違いを楽しむことも必要であることを述べることとしている。

3. 成果と課題

本授業では、アメリカの子どもたちに日本の文化、伝統を、年中行事という点から紹介し、さらに自分たちの行事と比較しながら文化の相違や自国の伝統を継承していくことの良さを伝えることを求めていた。年中行事の紹介については、写真とスゴクゲームを用いた活動を取り入れており、ゲームを授業の中に設定することによって、遊びながら学ぶことや一人ではなくグループで楽しんで活動することができていた。ゲームは三人一組の少人数グループを作り、ミッションをこなしながらコマを進めるものであったが、ミッションの中には、一人でできるものから、グループの仲間に協力してもらってはじめて達成することができるものもあった。例えば、「日本語で“こんにちは”と5人の先生にあいさつしなさい」というものを用意しており、止まった児童は恥ずかしそうに挨拶をしていた。また、「クリスマス」では、「グループ全員でクリスマスソングを一曲歌う」というものを準備していた。恥ずかしがるのではないかと心配をしていたが、グループみんなで歌うということもあり、楽しそうに歌っていた。中には、早く終わったグループの子どもたちも、他のグループの歌に合わせて合唱する場面もあり、暖かい雰囲気であった。一回目のゲームが早く終わったグループは、二回目を始めるところもあり、全体的に積極的に参加していたと思われる。しかし、課題としてあげられるのは、まずスゴクゲームの教具作りにとっても時間をかけてしまい、授業の流れがしっかり練れていなかったことである。行事の説明や最後の授業のまとめでは、話す言葉を書いた紙をそのまま読んでしまい、自分の言葉で授業をすることができなかった。授業者と児童の間に言葉の壁を痛感した授業だった。教材に頼ってしまい、もっと発問や指示を明確にしていく必要があった。また、ミッションがわかりづらいものがあり、全体での説明や内容をシンプルなものへなど改善の必要があったと考えられる。最後のまとめの部分では、ただ自分の考えを主張して終わってしまったので、児童から授業の感想や日本の行事や文化でおもしろかったものなどを述べさせても良かったと思う。

【自己の変容】

本研修において、改めて事前の準備や教材研究学の必要性を感じた。日本の伝統を他の国の子どもに伝えるということの難しさはもちろんだが、自分自身が自国の文化について十分に理解していなかった。また、同様に、相手の文化についても曖昧な情報で向かうことの怖さを感じた。そして、授業者と学習者の間のコミュニケーションの大切さについても改めて気づかされた。言葉の壁があっても、まず伝えたい、聞きたいという気持ちが最も重要になってくる。今回の体験を通して、一番伝えたい事をどのようにして伝えるのか、手段の工夫や、異文化の人に相互理解できるような場をどう設定するのか考えることができた。国際交流、異文化理解の学習の中で、自国の文化を他の国の人に伝えるということも大切だと感じた。

第6学年 国語科「Let's make onomatopoeia!」

教育学研究科言語文化教育教育学専攻国語文化教育教育学専修 小 笹 由 花

1. ねらい

本授業のねらいは、他国のオノマトベと自国のオノマトベを比較することによって、他言語に対する興味関心を高めさせるとともに、自分の使う言葉を振り返らせることである。

2. 概 要

本授業を行う少し前に、生徒たちは、担任教師からオノマトベについての授業を受けていた。そこで、本授業では、授業開始時に数人の生徒にオノマトベについての説明を求め、授業者がまとめるという形でオノマトベとは何かの確認を行った。さらに、動物などの絵を示し、英語のオノマトベを生徒たちに聞いた。鳴き声などを模倣した音を発することとオノマトベとの違いが明確でなかった生徒が多かったため、導入として非常に意味のある段階を踏ませることができた。

次に、日本語のオノマトベを紹介し、導入で用いた絵のうち、どれを表しているのか生徒にクイズ形式で当てさせた。どの言葉もクラスの1/3程度が不正解となった。明らかに意味がはっきりしていることば、全く分からないことばを用いるよりも、似ているようで全く異なるオノマトベは、生徒の他言語への興味を持たせることができるものとなったのではないだろうか。他者の意見にとらわれず、自分はどう思うのかを優先するアメリカの生徒の特徴も幸いした。さらに、カッコウの鳴き声のオノマトベを紹介した。「カッコウ」は日本とアメリカ以外の国にもオノマトベがある。日本語だけでなく、“他言語”への関心を持たせることがねらいだったため授業に取り入れた。ヨーロッパの言語を中心にあげたためか、生徒達は興味津々であった。

日本語には、オノマトベが多いと言われている。そこで、「不思議の国のアリス」から引用した文章を用い、英語には対応する語がないオノマトベを紹介した。

最後に、悲しみや嫉妬など、子どもの多様な表情の写真が並んでいるプリントを配布し、その中から一つ選ばせ、オノマトベを作らせた。そして、何人かの生徒のオノマトベを発表し、どの表情か他の生徒に考えさせた。ことばではなかなか伝わらない体験をさせることで、ことばの限界と可能性に気づかせた。

3. 成果と課題

授業において、生徒たちは他の言語のオノマトベに強い関心を示していた。日本だけでなく、ロシアやドイツ、フランスなどの言葉と比較したことは言語に関心を向けさせる良い題材になったといえる。

さらに、自分の考えたオノマトベをみんなに聞いて欲しい、意味を当てて欲しいという積極的な態度を示す生徒がほとんどであった。自国、他国にかかわらず、ことばに興味を持ってほしいという目的は達成された。しかし、授業後、知っている日本語の意味を聞いてくる生徒や挨拶など簡単な言葉を日本語で何と言うか聞いてくる生徒は担当した3クラスともいたものの少数であった。本当の意味で言葉に興味を持たせるためにオノマトベから他の語句に目を向けさせるアプローチが、十分でなかったのではないだろうか。

観察したクラスでは教師と生徒との1対1の質疑応答場面が多かった。前日に授業観察からわかってはいたもののグループ学習などを取り入れ生徒間の関わりが活発な授業を行うことができなかった。

【自己の変容】

誤答を授業に生かしたり、生徒と同じ目線になるように体勢を変えたりといった、日本では当たり前のように教師が行っていることを授業の中で行ってみた。アメリカにおいても十分通用する方法であることがわかり、自信をつけることができたものがある反面、アメリカでは上手いかなかったため日本においても本当に有効な手段であるのかについて考え直すきっかけになったものもあった。文化はもちろん、制度、組織、目標なども異なるからこそ、あえて日本の教師らしい授業を行ったことで、ほんの一部ではあるものの、日本の教育の特徴を実感することができた。また、“教師”という立場から日本以外の授業を観察した経験がなかったため、授業観察やアメリカの教師との対話は、新しい考え方や見方を得る貴重な経験となった。

第8学年 体育科「SAMURAI Mind」

教育学研究科生涯活動教育学専攻健康スポーツ教育学専修 竹内 俊介

1. ねらい

本授業のねらいは、日本の伝統的なスポーツである剣道を体験させることによってアメリカの子どもたちに他国の伝統や文化を受け入れることの大切さに気付かせることである。

また、本授業では剣道で使用する剣を子どもたち自身が新聞紙で作るので、子どもたちに自分達自身で作ったものを使用する喜びにも気付いてもらいたい。

2. 概要

まず、剣道の歴史や竹刀を用いることなどを説明した。本授業は、安全確保のため授業で使用する竹刀を新聞紙で作ることにした。新聞紙のサイズがアメリカと日本と異なっているので、日本から新聞紙を持っていった。

次に、子どもたちが剣道を知らないことが事前の打ち合わせで分かっていたので、まず映像を見せイメージを持たせ、その後に竹刀の持ち方や振り方をジェスチャー踏まえて丁寧に説明した。

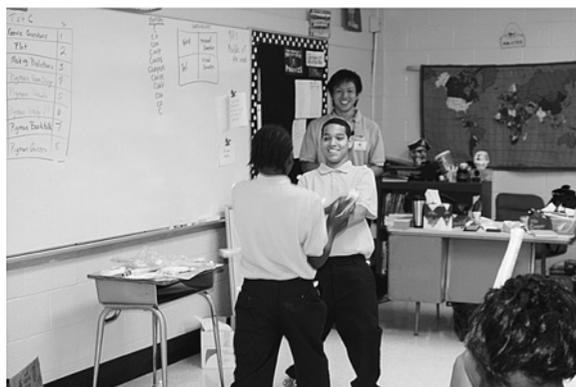
その後、剣道の試合の「礼に始まり、礼に終わる」という始め方や終わり方を映像により教え、武道の「相手を尊重する態度」を伝える。

そして、上記した剣道について本授業で学んだことを活かしたり、実際に身をもって体験したりできるように試合を行える機会をとった。

最後に、今回の授業で最も伝えたかったポイントである「剣道の礼儀や相手を尊重する態度のすばらしさ」を子どもたちに再度確認した。

3. 成果と課題

今回授業を行ったC. M. EPPESの8年生には、剣道を知っている生徒がほとんどいなかった。そのため、映像やジェスチャーを用いて説明を行った。すると子どもたちから非常によい反応が返ってきた。最後の剣道のゲームの時には、最高潮の盛り上がりが見えた。しかし、盛り上がり過ぎて叩き合いになる子どもも現れたので、危険回避の面からもこれを十分に抑えることを十分に行っていかなければならない。また、剣の強度が弱く、鞭のようになってしまう場面も見られた。叩いてもあまり痛くなく、丈夫な剣をさらに探求して作る必要がある。



授業実践の様子

【自己の変容】

これまで、「異文化理解」に対して英語が話せないからできないという印象が強く、敬遠していた自分がいた。

しかし、今回アメリカを訪問し、現地の子どものたちや先生方と話せないなりに懸命にジェスチャーなどを使って伝えようとする中でお互いを理解できるということを肌で実感することができた。しかし、同時に上手く話せない自分にもどかしさを感じ、言語力の向上を心に決めた。異文化理解の大きな動機づけとなり得るこのような経験を将来の子どものたちに体験させたり、話したりしていきたい。

表1 2009年度「体験型海外教育実地研究」における実施授業

	学年	教科等, 題材・テーマ*
A	3	総合(異文化理解) Let's enjoy Hinamatsuri!
B	3	異文化理解 三文字熟語で表現しよう
C	4	学級活動 What is your treasure ?
D	5	異文化理解 What are there annual events ?
E	6	異文化理解 Let's use onomatopoeia.
F	8	体育 SAMURAI Mind

*教科等名は、参加者(授業者)が付したものであり、授業を実施した当該校にとっては教育課程外の投げ入れ授業として位置づけられるものである。

「教科等, 題材・テーマ」の内容選択については、参加者に任されていた。参加者は、日本での事前学習において、授業の目標, 内容, 教材, 学習過程などについて相互に協議・検討し、具体的な準備を進めた。また、英文の指導案を作成し、イーストカロライナ大学のレッドフォード先生、エッパス中等学校のクーパー先生から直接助言をいただきながら、指導計画の改善を図った。その際、授業実施学年については、参加者の希望と指導内容を考慮して決定した。さらに、現地では受け入れ校の関係教員と事前の打ち合わせを行うとともに授業を実施するクラスを事前に観察した。このことにより、現地の児童・生徒の姿をイメージしながら最終的な指導計画の調整を行い、授業に臨むことができた。

このように、一時間の授業を実施するために、事前に多くの時間を費やし、参加者間の協議・検討や現地の先生方の助言に基づく授業改善を繰り返し行うことができたことは、本実地研究の一つの成果であると考えられる。

(2) 授業についての評価

帰国後、参加者は実施した授業をふり振り返り、レポートを作成した。また、発表会を行い、再度、授業について協議を重ねた。これらの事後検討の内容も踏まえ、本年度の授業について、主な成果と課題を以下に示す。

① 異文化理解を促す学習材の開発

参加者は、何れも個人の専門領域の特性を生かしながら、日本の文化に対する理解を促す学習材の開発を行うことができた(具体は前節に示している)。また、実施授業における米国の児童・生徒

の反応からも、児童・生徒が日本の文化に興味・関心を示し、意欲的に活動したことが分かる。

② 比較の場の設定による異文化理解

本年度の授業の半数は、異文化を比較する場を意図的に設定した授業であった。授業Dでは日米間の伝統的な行事を比較、Eでは多国間のオノマトペを比較、また、Cでは日米の同年齢の子どもたち(授業に参加している子どもたち自身)の宝物に対する見方・考え方を比較する場が設定されている。比較をすることでそれぞれの国の文化やものの見方・考え方の共通点や相違点が明確になる。授業や授業後における児童・生徒の反応からも、比較の場の設定が、他国の文化への理解とともに自国の文化への理解を深めるために有効であったと考える。今後はさらにこれらの取り組みを発展させて、異文化の比較の場を意図的に設定した授業を、米国と日本の両国で実施し、その成果を比較・検討するような実践研究も行いたい。

③ 多様な表現を用いたコミュニケーション

本年度の参加者の多くは、事前の段階で、英語で授業をすることに大きな不安を感じていた。それ故に、言語による表現を補うために、現実の映像(ビデオ, 写真)や自作の絵図を用いた説明、具体的な操作や試演, 分かりやすいモデルの準備・提示, 身振り手振り, 表情など、様々な表現の工夫を意図的に行った。その結果、前節で示した参加者の「自己の変容」の記述にも見られるように、言語のみに頼らない多様な表現の工夫を行うことで、他国の児童・生徒や教員とのコミュニケーションが成立し、授業内容について共感することができるという新たな認識をもつことができた。外国語や母国語の言語能力そのものを高めることは、これからの時代の教員に求められるグローバルな資質や能力を高めることに違いないが、同時に、教師がたとえ高い言語能力を有していたとしても、また母国語による授業においても、言語のみに頼らない多様な表現の工夫に努めることを期待したい。

以上、ここに示した成果と課題は、異文化間コミュニケーションを重視した授業構成員及び実践的指導力の向上につながるものと考えられる。

5. 過去3回の実施状況と考察

2009年9月に実施された米国での第3回体験型

海外教育実地研究によって、本プロジェクトは3年目を終えた。そこで、3年というひとつの区切りをもとに、参加した大学院生による授業の目標及び内容の傾向と今後の方向について、分析・考察を行ってみたい。

3年間に行われた教育実地研究の教科、トピックを精査してみると、授業の目的、内容、そして活動の種類によっておおよそ次のような3つのパターンに分類することができる。

① 日本文化紹介型（一方向的）

外国の学校での教育実地研究の目標や内容を定める際に、まず日本のことをいかに紹介するかが中心になる（日本民謡、など）。日米という関係で見た場合、日本人がアメリカ合衆国について理解している度合いに対して、アメリカ人生徒の日本理解があまり深くないという前提が考えられる。そのため、日本文化のうち社会制度、学校の様子などについてできるだけ紹介しようとするねらいは理解できる。その結果、授業は「日本は～である」といった、やや一方向的な日本文化紹介型になることはやむを得ないであろう。

② 日米文化比較型（双方向的）

授業を立案する際に、日本とアメリカ合衆国の制度や人々のものの見方・考え方の相違点に注目するのも一般的である。すなわち、授業において「日本では～であるが、アメリカでは～である」という対比的な紹介を行うことである（日米100円ショップ、など）。文化比較を通して、お互いの文化の類似点、相違点を浮き彫りにするだけでなく、双方向的にその違いに気づかせようとする授業はよりインパクトの強いものになるであろう。

③ 相互交流型（課題解決・目標発見型）

もう一つの授業の形は、日本紹介や日米両国の比較にとどまらず、ある活動目標（Tシャツをデザインしよう、など）のゴールを設定して、日本人教師とアメリカ人生徒が共同してそれに取り組もうとするものである。それを通して、文化の違いを相互に認識するとともに、自文化に対する客観的な理解が可能になる。

3年間の授業トピックをこれら3つの観点から分類すると、次のようになる。

この分類を通して、初年度は日本文化紹介型の授業が大半を占めたのに対して、2、3年次では、二文化比較や、共同作業型の授業が増加している

ことを示しているのがわかる。

表2 3年間の実地研究授業のトピック分類

年	教科等	トピック	紹介	比較	交流
1	総合	オノマトピア	○		
1	総合	落語	○		
1	道徳	日米の食習慣マナー	○		
1	図画工作	絵手紙	○		
1	特別活動	日本語ビンゴ	○		
1	総合	大好き広島	○		
1	音楽	日本民謡	○		
1	総合	日米100円ショップ		○	
2	総合	ジェスチャー		○	
2	言語	書道	○		
2	音楽	楽器やおもちゃの音	○		
2	図画工作	折り紙			○
2	図画工作	折り鶴	○		
2	図画工作	福笑い			○
2	社会科	いろいろな地図		○	
2	算数	五日並べ			○
2	言語	文化と言語	○		
2	総合	Tシャツデザイン			○
3	総合	ひな祭り	○		
3	言語	三文字熟語			○
3	学級活動	宝物			○
3	総合	年中行事双六ゲーム		○	
3	総合	オノマトピア		○	
3	体育	剣道	○		
		TOTAL	13	5	6

6. おわりに

これまでの研究を総合的に考察すると、大学院生が海外での授業実践を計画する際、日本紹介から、二カ国比較、協働作業の企画へと変容してきているのがわかった。今後、海外教育実習がより身近なものとなり、実習生の英語力がさらに向上することによって、さらに自信を持って相互交流型の授業が増えることを期待したい。

参考文献

- 小原友行ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究報告」『学校教育実践学研究』第13巻，2007，pp.1-9
小原友行ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究報告（Ⅱ）」『学校教育実践学研究』第14巻，2008，pp.39-53